

石原遺跡の縄文時代中期前半の

竪穴建物跡について

～北裏C II 式の検討～

● 田中 良

設楽町石原遺跡から検出された、縄文時代中期前半の竪穴建物跡について、平面形態や遺物の垂直分布などから検討を行い、北裏C II 式よりも新しい山田平式段階の竪穴建物跡の可能性が高いことを指摘した。

1. はじめに

愛知県埋蔵文化財センターでは、設楽ダムの建設に伴い、北設楽郡設楽町で広範囲にわたる発掘調査を継続して行なっている。それにより、縄文時代の遺跡が数多く発見されており、特に中期後半以降の遺跡が多い。

これらの調査成果は順次室内整理調査がなされ、すでに報告書が刊行されている遺跡もある。そうした中で、東海縄文研究会により「縄文中期の奥三河」と題した研究会が開催され、設楽ダム関連の発掘調査で明らかとなった縄文時代中期の遺跡が紹介された。

その中で報告された石原遺跡では、県下でも数少ない中期前半の竪穴建物跡や北裏C II 式土器の復元個体などについて報告された。

しかし、竪穴建物跡の構造や遺物の出土が寡少なことなどから、石原遺跡で検出された竪穴建物跡が中期前半のどの時期に比定されるのか疑問や問題点が数多く提起された。

そこで、今回は報告書では十分に検討出来なかった問題点などを解消するべく、竪穴建物跡について今一度再検討し、竪穴建物跡の時期が比定できそうな遺物や竪穴建物跡の形状について考察する。

2. 石原遺跡の調査成果

石原遺跡は、豊川上流の境川右岸の沖積地からなる緩斜面に立地している。2ヶ年におよ

調査により、縄文時代早期後半、縄文時代中期前半、縄文時代後期末～弥生時代前期の遺構と遺物が検出されている(田中 2023)。

縄文時代中期前半の遺構は、遺跡の南西から検出され、竪穴建物跡があるエリア(1199・1299 グリッド)と土坑と遺物集中地点からなるエリア(1097 グリッド)に分かれる(田中前掲)。

竪穴建物跡がある 1199・1299 グリッドからは、竪穴建物跡 170SI とその下層から竪穴建物跡 325SI が検出された。また、170SI と 325SI を掘り込む形で、著しい土坑の重複(土坑群)が認められた(289SK・291SK など)。

図1は、土坑群と竪穴建物跡の関係を表した図である。土坑群は互いに重複しており、竪穴建物跡 170SI の炉跡と想定される場所も掘り返している。これらの土坑群からは、竪穴建物跡の埋土中よりも多くの遺物が出土している。また、289SK のように集石を伴う土坑もある。289SK と 291SK では炭化物も多く含まれており、その分析結果を表1に記載している。

竪穴建物跡 170SI は、長軸 4.696m、短軸 0.962m、深さ 0.165m を測り、壁溝と支柱穴の一部が検出された。

土坑群と竪穴建物跡 170SI の下層からは、竪穴建物跡 325SI が検出された。長軸 7.598m、短軸 7.502m、深さ 0.548m を測り、中央に石囲炉を伴い、壁溝と支柱穴が検出された。炉と壁溝の切り合い、柱穴の数からみて、建て替えがおこなわれている可能性がある。

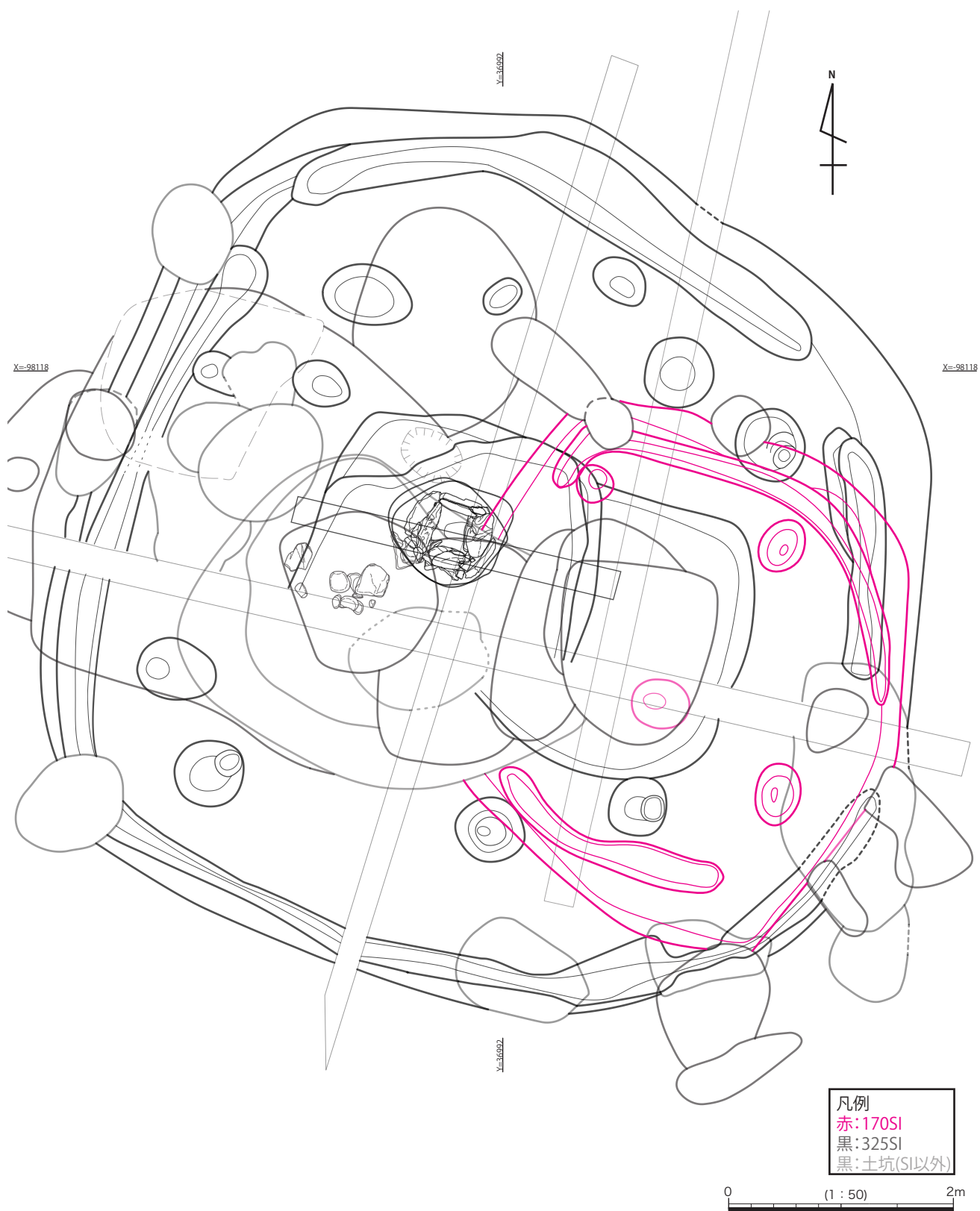


図1 土坑群と竪穴建物跡 170SI・325SI の位置関係 (S=1/50)

3. 竪穴建物跡の再検討

竪穴建物跡とそれに伴う遺物に関しては、既存の報告書に記載されているが、それぞれの竪穴建物跡の床面やその直上の遺物がどれに比定されるのか、そのあたりの記述がなされていない。そのため、今回改めて土層断面図を手がかりに竪穴建物跡の床面を推定し、合わせて遺物の垂直分布とともに検討する。

図2・図3は竪穴建物跡170SIの遺構平面図に土層断面図を合成し、そこに遺物の分布を落とし込んだ図である。まず平面形状について見ると、方形ないしは隅丸方形に近い形状をしており、規模は長軸約4.7m、短軸約1mを測る。壁溝が南北で検出され、柱穴は3基検出されているが、想定されるもう1基は土坑群によって掘り返されており、確認出来ていない。炉跡も同様であるが、床面と思われる場所で炭化物が散らばっているため、炉もあったと考えられる。

次に、170SIの床面を土層断面と遺物の垂直分布から検討する。170SIの土層断面から検討すると、東西(A-A')では掘り方の埋土のみ確認でき(図2)、南北(B-B')の土層断面では埋土と掘り方の堆積が確認できる(図3)。このことから床面と考えられる面は、掘り方の直上(赤破線)になると考えられる。しかし、遺物の垂直分布で見ると、床面よりも上や下に分布しており、出土傾向にばらつきが認められる。遺構検出時の深さが0.165mしかないことや上層に土坑群があることから、掘り返されており状態が良くないことが分かる。そのような中で、床面直上と考えられる遺物を選び出したものが図6である。

床面の炭化物を採取し炭素年代測定を行い、年代値を得ている(表1・試料No.3)。詳細は報告書を参照していただきたいが、結果だけ抜粋すると、2779-2619calBCとなる。土坑群から得られた年代値と比較すると、291SKでは2699-2574calBC、289SKでは2709-2581calBCとなっている。また、170SIの試料の炭化材は、遺物分布図(図2のd-1005)をみると、土坑群の中に入ることから、

分析した炭化材は、土坑群の年代値を示している可能性が高い(表1・試料No.3)。

図4・5は、竪穴建物跡325SIの遺構平面図に土層断面図を合成し、そこに遺物の分布を落とし込んだ図である。まず平面形状について見ると、方形ないしは隅丸方形に近い形状をしており、規模は長軸約7.6m、短軸約7.5mを測る。上層にある170SIの約1.6倍の大きさであり、大型の竪穴建物跡である。壁溝が四隅で一部切り合って検出され、柱穴は竪穴の角に10基確認されている。その位置関係から2段階の建て替えが想定できる(赤実線がI段階、赤破線がII段階)。柱穴の構造は、4本を基準とした主柱穴構造と考えられるが、I段階の柱穴は北側に張り出す形で5本柱となっている。炉跡は、石囲炉であり、石の据えてある範囲の外側には炉の掘り方と思われる炭化物と焼土の混ざる落ち込みが検出されている。石囲炉は、南側と東側に石が2重で検出されており、やや軸線も異なっている。炉の掘り方も切りあっており、炉の作り替えが想定される。このようなことから、325SIは掘り方を共有しながら建て替えられている可能性が高い。建て替えの時間差に関しては、間層を挟んでいないことや石囲炉の石の共有、柱穴が切りあっていないことから、時間差はほとんどないと考えられる。

325SIの床面を土層断面と遺物の垂直分布から検討してみると、東西(A-A')と南北(B-B')では、埋土と壁溝、炉跡掘り方、竪穴掘り方が確認でき、土坑群の掘り込み(267SX・291SK・305SK)の影響も認められる(図4・5)。このことから、床面が残っていない部分もあるが、東西断面では掘り方および358SXと330SLの直上(赤破線)、南北断面では掘り方および330SL直上(赤破線)となる。南北断面の床面が南へ傾斜しているのは、現地形の傾斜と一致しており、掘り方と床面が流失している可能性が想定される。

上記のことから、堆積状況は安定しており、遺物量は少ないものの、遺構としての残存状況は良好であったと考えられる。遺構検出面から掘り方までの深さは0.548mとなっている。遺物は、床面付近と埋土の上面に分かれて分布している(図4・5)。その中から出土地点が分かり、

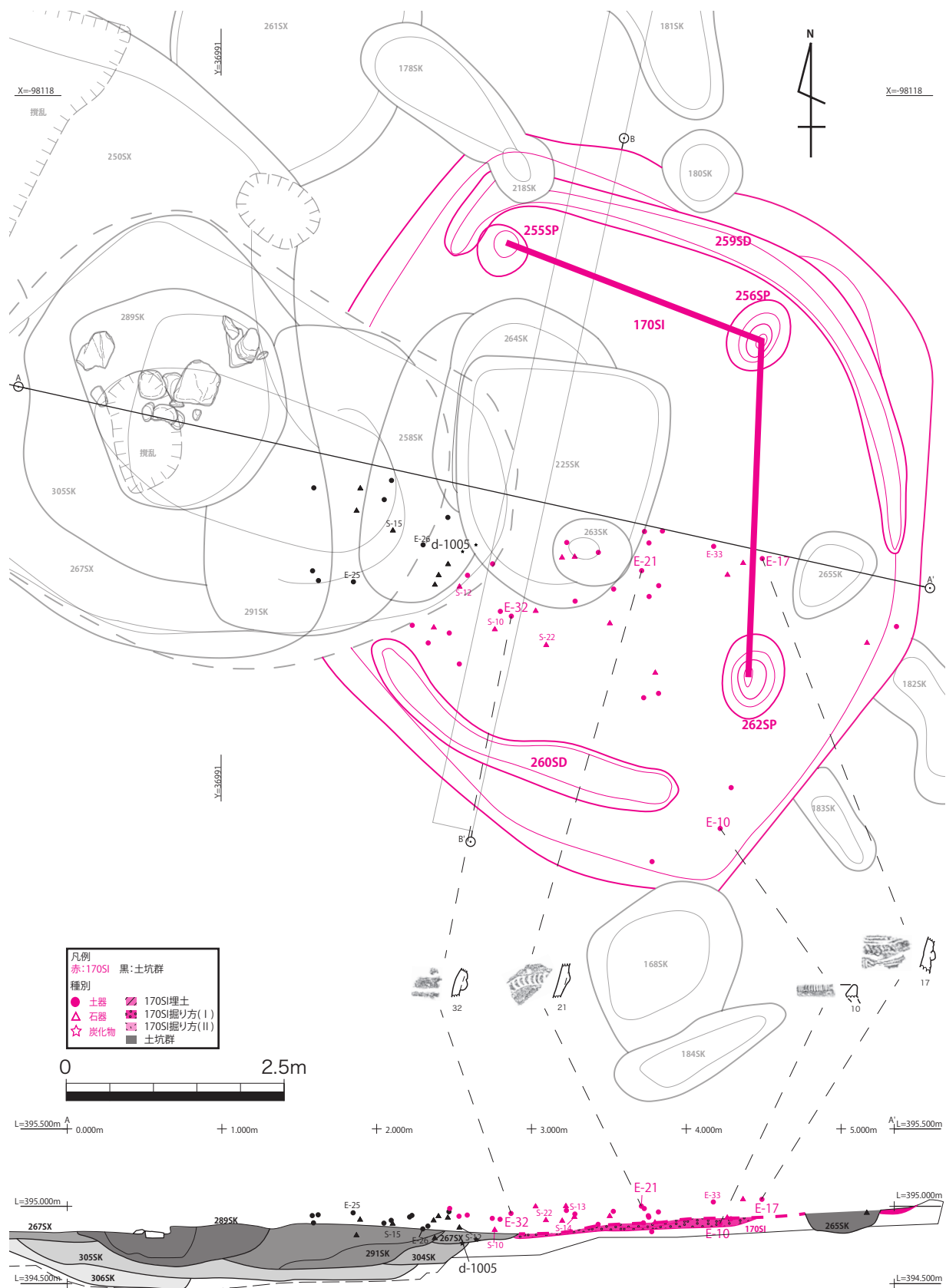


図2 竪穴建物跡 170SI 遺構平面図・遺物分布図(南側)



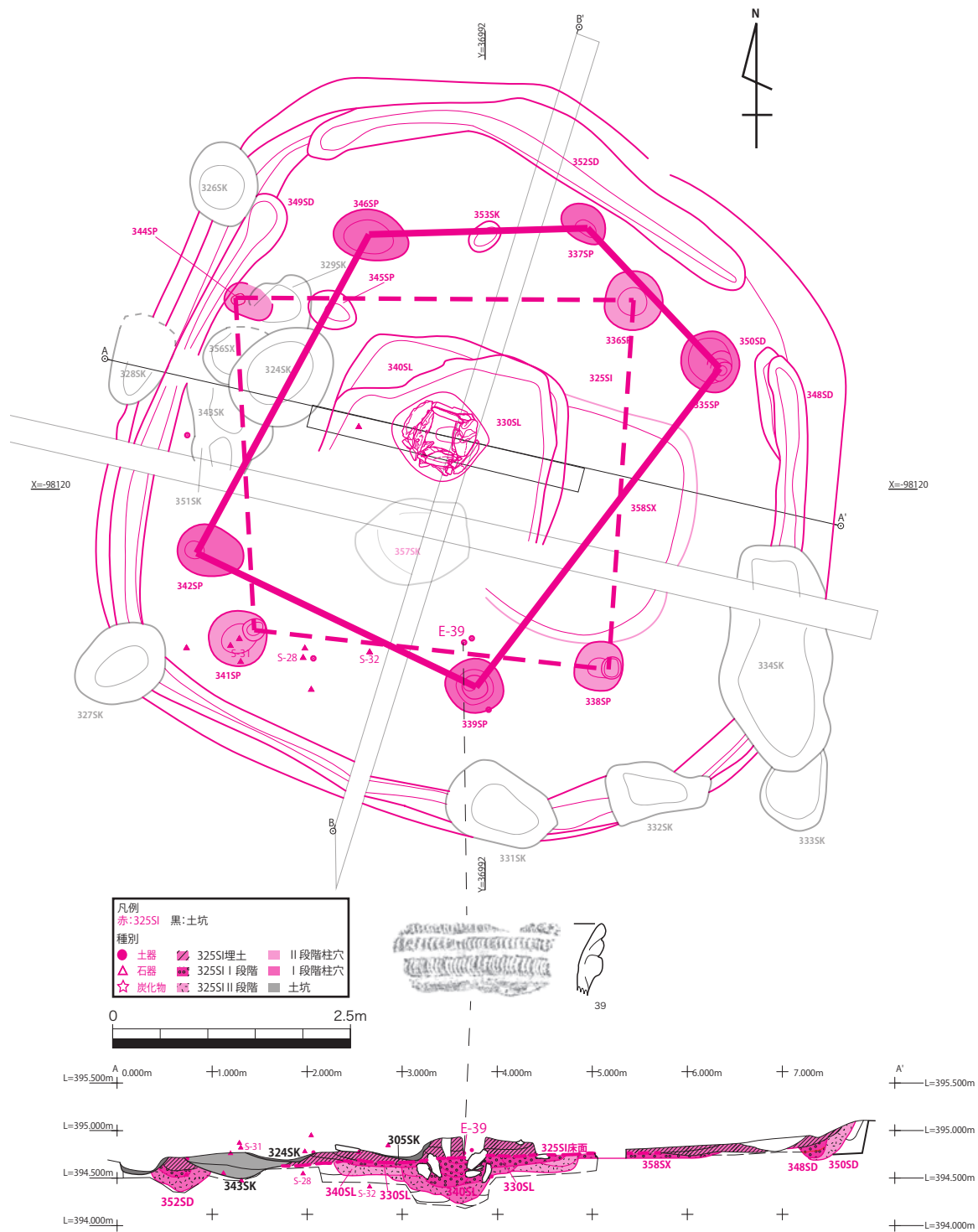


図4 竪穴建物跡 325SI の遺構平面図・遺物分布図(南側)

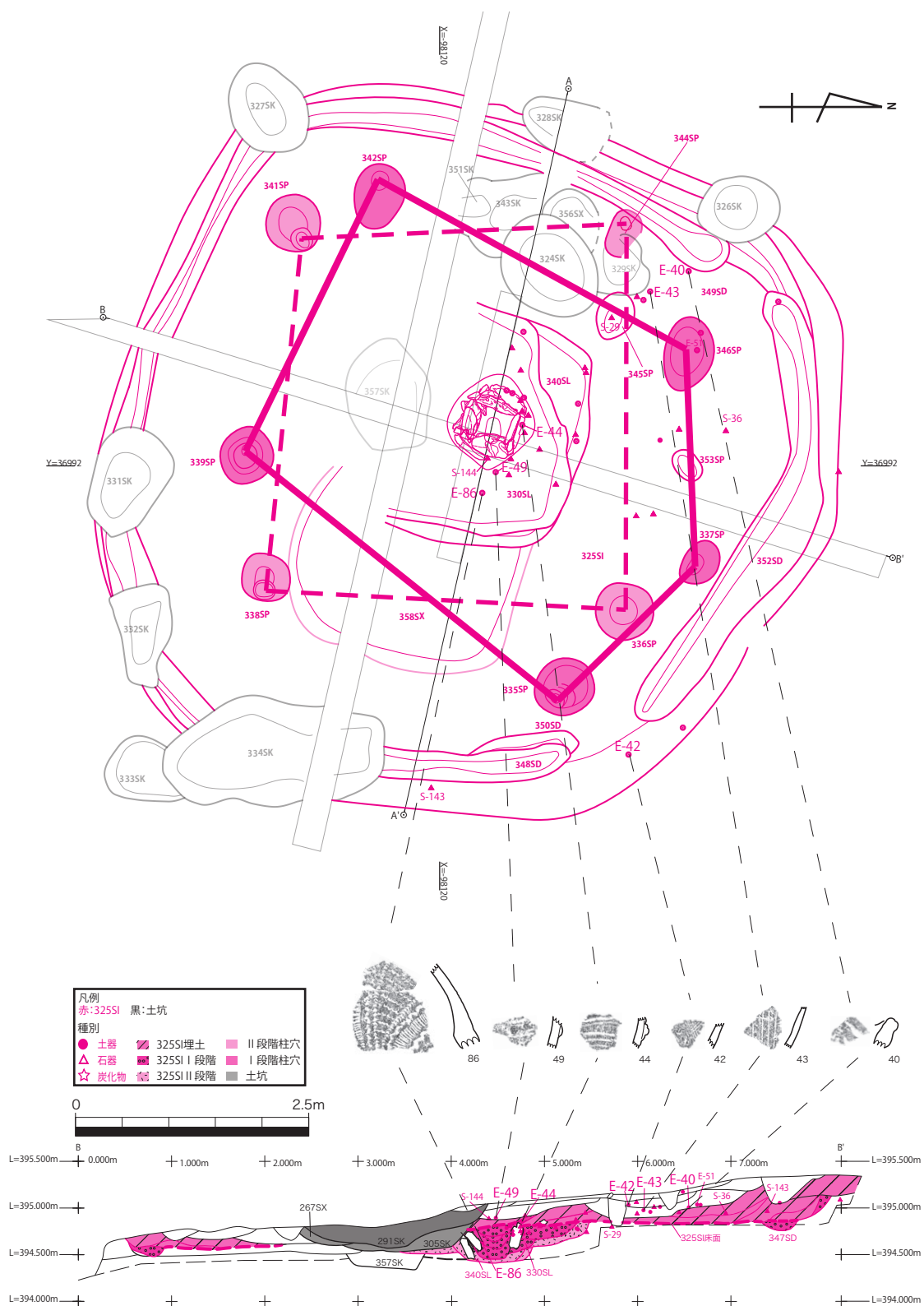


図5 竪穴建物跡 325SI 遺構平面図・遺物分布(北側)

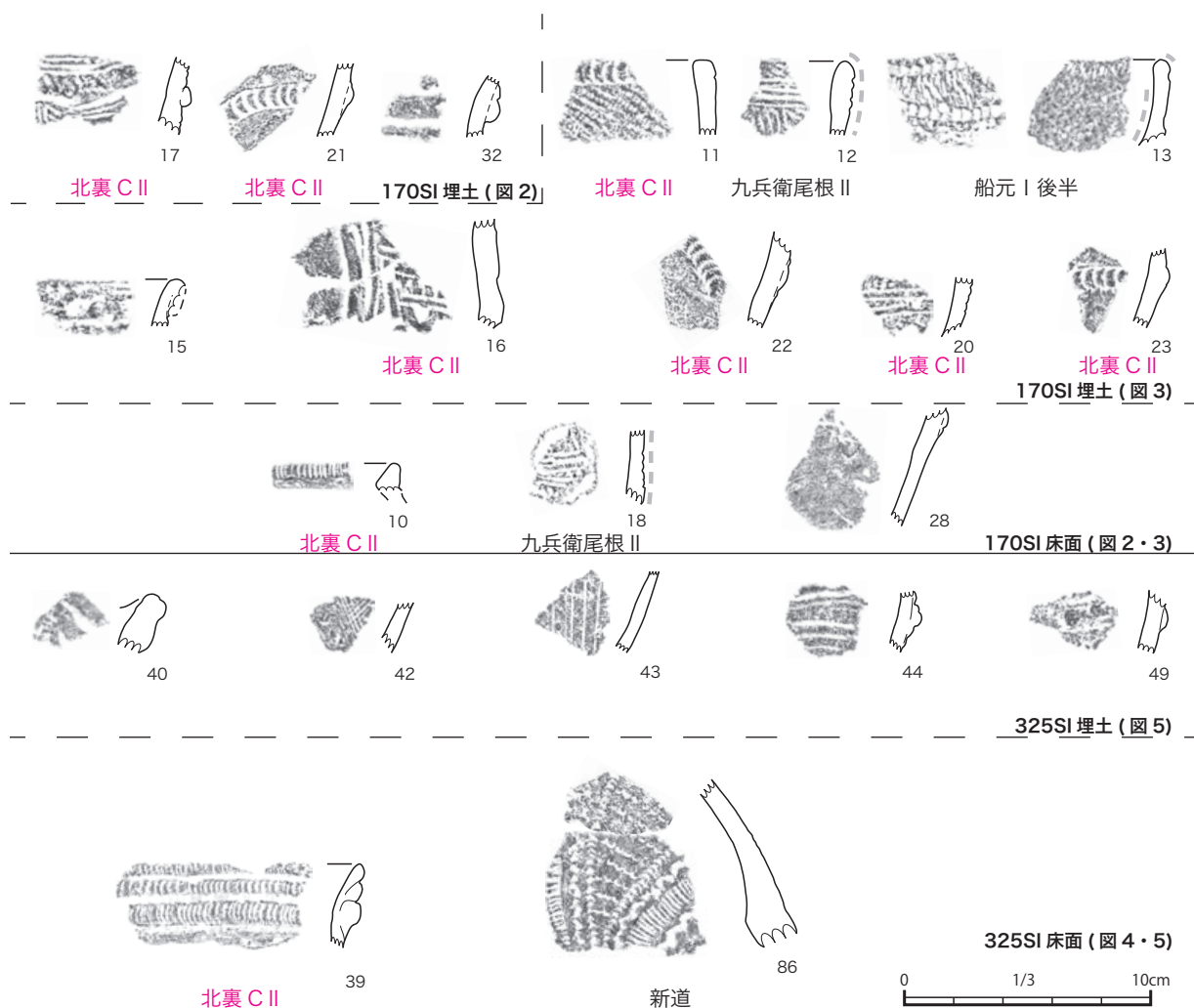


図6 竪穴建物跡 170SI・325SI の出土土器 (S=1/3 遺物番号は報告書掲載番号)

文様がある土器片を抜き出したものが図6の325SI出土遺物である(図6)。下段の39と86が床面遺物として抜き出せるが、86は報告書では291SKの遺物として報告されている。これは、291SKから出土した土器と330SLから出土した土器が接合したことから、遺構の状況を鑑みて土坑群に属する遺物として評価した。しかし、今回遺物分布を再検討した結果、土坑群の掘り込みのレベルよりも下位から出土していることと、平面的にも土坑群よりも外れた位置で出土していることから、330SLの遺物である可能性が高いため、325SIの遺物とした(図6)。

石囲炉から採取した炭化物についても炭素年代測定を行い、年代値を得ている(表1・試料No.4・No.5)。詳細は報告書を参照していた

だきたいが、結果だけ抜粋すると、330SLが2696-2572calBC、340SLが2696-2569calBCとなる。330SLと340SLの年代値がかなり近接していることから現場所見と合わせて325SIの建て替えには時間差がほとんどないことが分かる。

4. 竪穴建物跡の時期

最後に、170SIと325SIの時期について、今回の再検討を行なった結果から考えてみたい。

170SIと325SIの時期差については、報告書の見解では、両者に共通する遺物が出土していることから時期差はないとなっているが、今回の再検討の結果では、両者の残存状況が異なっており、170SIに関しては残存状況が悪く、

表1 土坑群・竪穴建物跡 170SI・325SI の炭素年代測定結果 (パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 2023)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38005 試料 No.1 291SK 炭化材	-27.71 ± 0.29	4096 ± 23	4095 ± 25	2835-2817 cal BC (12.8%) 2666-2580 cal BC (55.4%)	2857-2811 cal BC (20.9%) 2748-2724 cal BC (5.1%) 2699-2574 cal BC (69.5%)
PLD-38006 試料 No.2 289SK 炭化材	-28.69 ± 0.23	4120 ± 22	4120 ± 20	2853-2813 cal BC (20.0%) 2744-2726 cal BC (8.8%) 2696-2626 cal BC (39.4%)	2863-2806 cal BC (26.5%) 2759-2717 cal BC (15.8%) 2709-2581 cal BC (53.2%)
PLD-38007 試料 No.3 170SI 炭化材	-27.35 ± 0.22	4132 ± 21	4130 ± 20	2858-2833 cal BC (14.5%) 2819-2810 cal BC (5.0%) 2752-2722 cal BC (16.6%) 2701-2659 cal BC (23.9%) 2651-2634 cal BC (8.2%)	2869-2802 cal BC (28.1%) 2779-2619 cal BC (67.3%)
PLD-38008 試料 No.4 340SL 炭化材	-27.35 ± 0.26	4086 ± 23	4085 ± 25	2834-2819 cal BC (11.0%) 2661-2648 cal BC (7.8%) 2636-2577 cal BC (49.5%)	2853-2812 cal BC (16.9%) 2744-2726 cal BC (2.4%) 2696-2569 cal BC (73.7%) 2515-2502 cal BC (2.4%)
PLD-38009 試料 No.5 330SL 炭化材	-27.11 ± 0.20	4089 ± 22	4090 ± 20	2834-2819 cal BC (11.6%) 2662-2648 cal BC (8.6%) 2636-2579 cal BC (48.0%)	2853-2812 cal BC (18.0%) 2744-2726 cal BC (2.6%) 2696-2572 cal BC (73.6%) 2513-2504 cal BC (1.2%)

時期を特定しがたい。ここで、出土地点が特定できる土器について提示し、東海系土器(在地の土器)を赤、搬入土器を黒で明示した(図6)。東海系土器は、北裏CⅡ式(10・11・16・17・20～23・39)が挙げられる。次に搬入土器としては、九兵衛尾根Ⅱ式(12・18)、新道式(86)、船元Ⅰ式(13)が出土している。

170SIでは、北裏CⅡ式(10・11・16・17・20～23)と九兵衛尾根Ⅱ式(12・18)、船元Ⅰ式(13)が出土している。遺物では北裏CⅡ式の竪穴建物跡と判断できそうだが、北裏CⅡ式土器は石原遺跡の中期前半の遺構が検出されたエリア(18B区)で多く出土しており、遺構の埋没過程で混ざる可能性が十分考えられる。そのため、この土器片をもって時期を特定出来ない。しかし、北裏CⅡ式期から遺跡利用が活発となることの指標となると考えられる。

325SIからは、北裏CⅡ式(39)と搬入土器の新道式期の抽象文土器(みづち文)が出土している(86)。86は石囲炉330SLの掘り方から出土しており、325SIの時期を決める遺物である可能性が高い。しかし、遺物量が少なく土器よりも石器の方が多いため、断言できない。また、抽象文土器は信州系の搬入器であり、これに伴うとされる在地の土器は山田平式土器であ

る。しかし、山田平式土器は遺跡全体でもわずかしこ出土しておらず、報告書に掲載されている170SIと325SIの出土土器にはない。全体をみても明らかに多いのは北裏CⅡ式とされる土器である。搬入土器とされている土器では、九兵衛尾根Ⅱ式(倉平)と新道～藤内Ⅰ式で、新道～藤内Ⅰ式の土器片の方が多く、この点を強調するならば325SIの時期に近接してくると思われる。

遺物量が総じて少なく、土器片1点をもってして時期を特定しようなどとは恐れ多いことである。そのため、最後に遺構の形態的特徴を列挙し、他の遺跡の類例を少し引用する形として今回の検討を終え、今後の課題としたい。

今回の再検討で明らかになった325SIの特徴は、平面形態は方形、方形の石囲炉を伴う、柱穴は4～5本の主柱穴で、北側にやや張り出す5本柱があることである。筆者の力量不足で、類例全てに当たれていないため、今後の課題としたいが、類例を少しあげるとするならば、新城市東平遺跡では、方形の石囲炉と4本の主柱穴構造が類似する。時期は、北屋敷Ⅱ式～咲畑式期とされる。静岡県長泉町上山地遺跡(亀田・平川1990)の竪穴建物跡は、方形の石囲炉を伴い、5本の主柱穴で北か南側に張り

出すような形態をとるものがある(1号住居址・5号住居址・9号住居址など)。これら住居址の多くは山田平式～子種式段階とされている。

石原遺跡から検出された竪穴建物跡 325SI は、遺構からみると上山遺跡の例によく似ている。

5. おわりに

今回の検討結果では、石原遺跡の竪穴建物跡 170SI と 325SI は北裏C II 式期よりも新しい中期中葉の山田平段階に位置付けることとなった。これについては、石囲炉を伴う竪穴建物跡が東海地方で出現する時期と密接に関わってくる問題だと思われる。この点に関して、筆者の勉強不足があり今すぐ議論できる状態にない

が、課題として残るため今後とも探求していきたい。展望として述べるならば、北裏C I 式の岐阜県南森遺跡の住居址などは地床炉であることから、北裏C II 式～山田平段階に石囲炉が出現する可能性が浮かんでいるが、今後しっかりと検討していきたい。

本論を執筆するにあたり、永井邦仁氏には、本論の検討方法や現場担当者としての所見など貴重なご意見をいただいた。さらに、「東海縄文研究会」では、川添和暁氏にお誘いいただき石原遺跡の成果を報告する機会をいただき、そこでは長田友也氏と高橋健太郎氏から竪穴建物跡の時期について厳しいご意見をいただいた。記して感謝申し上げる。また、信州系の土器に関して、綿田弘実氏と岩永祐貴氏にご教授いただけた。記して感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 紅村 弘・増子康真 1980 『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』 八百津町教育委員会
亀田宗宏・平川昭夫 1990 『上山遺跡』 長泉町教育委員会
静岡県考古学会 『縄文時代中期前半の東海系土器群 - 北屋敷式土器の成立と展開 - 予稿集』 静岡県考古学会シンポジウム'97 第5回東海考古学フォーラム 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
田中 良ほか 2023 『石原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第217集 愛知県埋蔵文化財センター
田中 良 2023 「縄文時代中期前半の東海地方について―設楽町石原遺跡の出土資料を中心として―」『東海縄文研究会第18回愛知研究会 縄文中期の奥三河発表予稿集・資料集』3頁～12頁 東海縄文研究会
パレオ・ラボ AMS年代測定グループ 伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也 2023 「石原遺跡における放射性炭素年代測定(その1)」『石原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第217集 138頁～140頁 愛知県埋蔵文化財センター
増子康真 1995 「3. 東海地方の縄文時代中期前半土器型式の変遷」『クダリヤマ遺跡』81頁～97頁 稲武町教育委員
増子康真・山下勝年 2002 「東海西部の縄文中期前葉土器編年」『古代人』62号 12頁～33頁 名古屋考古学会
増子康真 2008 「北裏C～北屋敷II式土器」『総覧縄文土器』486頁～493頁 アムプロモーション
増子康真 2023 「船元式土器と東海系縄文中期前半土器の関係再考」『縄文時代』第34号 161頁～174頁 縄文時代文化研究会
山下勝年・増子康真 2002 「山田平式土器について」『伊勢湾考古』16号 51頁～86頁 知多古文化研究会